



① 目標の設定

現状や歴史的変遷を踏まえ問題の原因の絞り込みを行ったうえで、時間スケール、社会的条件等により生じる制約、関連する計画・活動との整合性、その土地の風習や伝統と結びついた川に対する思いや要望、及び自然環境の保全に対する意識など地域の環境認識等を考慮して、実現可能な目標の設定を行います。

●実現可能な目標の設定

河川はそれぞれ地理的、気象的、歴史的要素によって自然の成り立ちが変わることから、その川にふさわしい目標を設定すること、地域の人々とともに目標の設定を行っていくことが重要です。その際、目標の設定の考え方やプロセスを明示することが不可欠です。

目標の設定に際しては、河川周辺の土地利用や河川を取り巻く社会活動などといった社会的条件を考慮し、実現可能性を検討することが必要です。現在、多くの河川の周辺は高度に利用されており、自然再生は環境保全を目的とした事業であるとは言え、必ずしも河川を原生の姿に戻すことが目的ではありませんので、社会的に許容できる範囲において、目標を設定することが重要です。したがって、流域内における関連する計画等（都市計画、地域森林計画、流域下水道整備総合計画、市町村総合計画など）も整理し、整合を図る必要があります。



堤防ぎりぎりまで市街化された河川

●段階的な目標の設定

目標は段階的に設定することも可能です。例えば、下記に示すような事例があります。

釧路湿原保全のための流域管理目標

長期目標：ラムサール条約登録（1980）当時の環境への回復

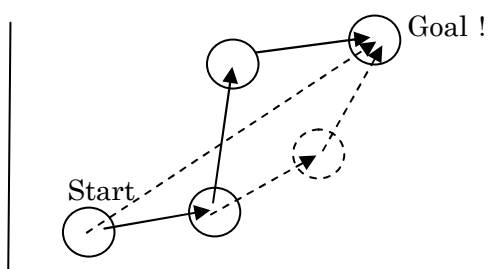
流域・河川からの負荷を土地利用が急速に展開した以前の水準に戻す必要がある

当面の目標：2000年現在の湿原の状況を維持

流域・河川からの負荷を少なくとも概ね20年前の水準に戻す必要がある

この例のように、できるだけ段階的（短期・長期）な目標の設定を行うことで、取り組みのモニタリング・評価がやりやすくなり、手直しを加えつつ順応的な事業展開が可能となります。また、モニタリング・評価結果などに応じて目標自体も見直すことが必要となる場合もあります。

右のイメージ図のように自然再生のゴール（目標）への道筋は決して一直線ではありません。短期的な目標を置き、状況に応じて手直しをしながら、ゴールを目指すこととなります。



●目標の設定とモニタリングの指標

目標の設定は、事業実施後のモニタリング・評価も見越して行います。できるだけ取り組みに参画する人々が共有でき、わかりやすく、モニタリングしやすい指標で、より具体的に目標を表現（指標化）することが望ましいと考えられます。

右図は1つの考え方ですが、河川環境を捉える指標としては、河川特性（流量、川幅／水深、摩擦速度、水質などの物理量）や生息・生育環境（瀬・淵、河原、州、植被、開空率など）およびこれらを基盤として生息・生育する生物群集（重要種や典型種、植物相、動物の行動など）などに分類することができます。

これらのうち、河川特性と生息・生育環境はある程度直接的に管理（操作）が可能で、どのような状態に改善するかのも目標も定めやすく、目標を基準にしたモニタリングや評価も比較的容易と考えられます。

一方、河川環境の健康状態の表現においては、人為影響の少ない状況で生息・生育している生物群集を目安にすることが多いと考えられ、環境上の目標としてある生物の生存や再定着などが提案されることもよくあります。しかし、生物は直接人が管理する対象とはしにくい（どの程度の数・密度などになれば十分というレベルを設定しにくい）ことに注意する必要があります。また、モニタリングや評価においては、生物は人為的に操作できる環境要素以外の環境の変化や生物自身を持つ特性に応じて変動することがあることにも注意が必要です。

